

臨時監査「教育」の監査報告書

監事計画に挙げた3つの重点項目のうち「教育」について、対象部門を選定し、書面調査と面談によって監査を実施した。監査の概要と監事意見は以下のとおりである。

【テーマ1】京都大学特色入試改善への取組

I. 監査項目と主な監査内容

項目：京都大学特色入試改善への試み

京都大学では、様々な教育背景のもと学力試験だけでは測ることのできない多様な能力を身に付けた意欲的で優秀な学生を確保するために、平成28年度入試より「京都大学特色入試」を開始した。この第1回目の特色入試の実績を踏まえ、今回の監査では「特色入試改善への試み」について監査を行った

II. 監査の方法

1. 監査の方法

既存資料等により書面調査を行うとともに、予め通知した質問項目にしたがって調査対象部局長、担当教員、事務担当者に面談することにより監査を実施した。

2. 監査の実施先

(1) 経済学部	8月25日（木）
(2) 理学部	9月2日（金）
(3) 医学部	9月5日（月）
(4) 工学部	9月6日（火）

III. 監査結果

【部局の取組－経済学部】

1. 特色入試を通して求める人物像

経済学部は、総合的な学力とともに、長文読解力、問題発見力、論理的思考、柔軟な思考と創造性、そして高い自学自習の能力を持つ人材を求めている。

2. そのような人材を獲得するための方法と今年度の実績

今年度は提出書類、大学入試センター試験、及び論文試験の成績を総合して合格者を決定した。

第1次選考は、経済学部での教育を受ける基礎学力を重視し、大学入試センター試験の得点（ただし、英語は250点満点を200点満点に換算）の合計が900点満点中630点以上の者のうち上位80名を上限として合格者を決定した。

第2次選考では、第1次選考に合格した者に対して、学業活動報告書、学びの設計書、及び論文試験の成績を総合して合格者を決定した。学業活動報告書では、出願者の高等学校在学中の学修における行動や学内外での活動について評価した。学びの設計書では、高等学校段階までに育成されている学ぶ力及び経済学部の教育を受けるに

ふさわしい能力並びに志を総合的に評価した。論文試験では、出題は1問とし、長文読解力、問題発見力、論理的思考、柔軟な思考と創造性などについて評価した。

募集人員は25名、志願者は77名、第1次選考合格者は61名、第2次選考（最終）合格者は25名となり、全員が入学した。

3. 今年度実施によって明らかになった問題点、課題

- (1) 出願から入学試験までの日程が各部局ごとにバラバラでわかりにくいとの意見が高等学校からあった。第1次選考結果発表日と第2次選考実施日までの日程が短かく、遠方の受験生への配慮に欠けていた。
- (2) 今年度は、第1次選考で大学入試センター試験の得点により可否を決定した。しかし、この底点7割は他学部で8割や8割5分と比較して相対的に低く、入学後の講義についていける基礎学力があるのかどうかという疑問もあり、この点については検討を要する。
- (3) 今年度は、提出書類の中で「調査書」については書類選考の評価に加えていなかったため、高等学校での学修成果を把握する資料にすることができなかった。来年度以降は、「調査書」も書類選考の評価に加える必要がある。
- (4) 長年、論文入試を実施してきたので、論文型の試験の運営については、特に新たな課題はない。

4. 今後の募集人数の拡大や改善点など

(1) 募集人数について

経済学部での募集人数は、京大の学部中最多であったことに鑑みて、拡大の予定はない。とりあえず現状維持とする。ただし、実際の合格者数については、合否判定の総合的な判断の結果、募集人数を下回る可能性はある。

- (2) 出願から試験までの日程が各部局ごとに異なっていたこと、第1次選考結果発表日と第2次選考実施日までの日程が短すぎるなどから、次年度は選考方法を変更し、また全学で日程を統一することとなった。

	平成 28 年度	平成 29 年度
出願受付	11 月上旬	11 月 1～7 日
第 1 次選考結果発表	2 月 3 日	11 月 30 日
第 2 次選考	2 月 5 日	12 月 17 日
第 2 次選考結果発表		1 月 13 日
合格発表	2 月 10 日	2 月 8 日

- (3) 今年度はまず基礎学力を重視し、第1次選考で大学入試センター試験の得点により可否を決定したが、特色入試の特徴をさらに生かすために、次年度は第1次選考において提出書類のみで選考を行い、第2次選考を筆記試験で行い、最終可否を大学入試センター試験の得点を主たる基準として決定することに変更した。

- (4) 提出書類の中で「調査書」については評価の対象にしていなかったが、高等学校での学修成果を丁寧に評価するため、次年度は、第1次選考の評価に「調査書」を加えることにした。
- (5) 大学入試センター試験の点数について、今年度は最終選考で合計得点の7割(900点満点中630点)以上を合格者としたが、合格者が8割(900点満点中720点)以上の点数を取得していたこと、他学部においても8割以上を条件としているところが多く、本学部でも無理のない条件と判断し、次年度は概ね8割以上の得点を取得した者を合格者とすることにした。
- (6) 入学資格(出願資格)について一般入試と同様の資格にしていたが、特色入試で求める人材に受験してもらうため、次年度より出願資格を限定し、高等学校卒業後あるいは同等の課程修了後2年以内の者とした。

5. 特色入試で入学した学生の能力をさらに伸ばすための支援や教育プログラムの有無

現時点では、特色入試で入学した者も一般入試・理系入試で入学した者と区別せず、同じ教育制度のもとで対応しており、特別の教育プログラムなどは用意していない。しかし、例年1回生向け授業科目「入門演習」において、入学時までの学習状況や現在の学生生活等についてのアンケートを行っており、今年度もその結果を分析したうえで特色入試入学者の対応を検討することになっている。

【部局の取組 — 理学部】

1. 特色入試を通して求める人物像

理学部では、自由な雰囲気の下で学問的創造を何よりも大切にし、自律的学修が推奨される学風のもとで、自然科学の基礎体系を深く習得し、それを創造的に展開する能力と、個々の知識を総合化し、新たな知的価値を創出する能力の養成を教育の目標にしている。そのために、理学科のみの1学科制の下で、緩やかな専門化を経て、研究の最前線へ向う教育を行っている。

理学部が望む学生像は、自由を尊重し、既成の権威や概念を無批判に受け入れない人、自ら考え、新しい知を吸収し創造する姿勢を持つ人、高等学校の教育課程の修得により培われる十分な科学的素養、論理的合理的思考力と語学能力を有し、粘り強く問題解決を試みる人であり、この特色入試では、そのような人の中で、特に、数理科学の分野において極めて優れた才能を持つ人を求めている。

2. そのような人材を獲得するための方法と今年度の実績

第1次選考として、高等学校での学修における行動や成果を丁寧に評価するために、「調査書」、高等学校長が作成する「学業活動報告書」、志願者本人が作成する「学びの報告書」を提出書類としている。それにより、高等学校での学修における行動や成果のうち、特に数学についての取り組み状況や課題研究、課外活動等数学についての在学中の顕著な活動歴を見る。また、大学生活において何をどのように学びたいか、

大学卒業後、大学で学んだことをどのように活かしたいかを具体的に設計させて、筆記試験だけでは見ることができない、志願者自らの学ぶ意欲や志について書類審査を通じて評価する。

第2次選考は、数学に関する能力測定考査と口頭試問を課している。数学に関する能力測定考査では、数理解理解力、問題解決力、論理的思考力、明解な説明能力などについて、口頭試問では、意欲や適性などについて評価する。なお、数学に関する能力測定考査は、4時間で4問を解かせる出題とした。

最終選考は、大学入試センター試験の成績を利用することにより基礎学力を担保している。

平成28年度特色入試における出願者数は59名で、第1次選考は全員合格、第2次選考では数学に関する能力測定考査合格者に対して、口頭試問を実施した結果、5名が合格者となった。大学入試センター試験の得点により、5名全員が最終合格者となり、全員が入学した。

3. 今年度実施によって明らかになった問題点、課題

第2次選考の数学能力測定考査の合格者を大学の掲示板により試験翌日の8時30分に発表したため、不合格者は口頭試問を受験することができずにそのまま帰宅することとなった。また、そのことを学生募集要項に明記していなかったため、不合格者には負担をかけてしまった。

第2次選考の数学能力測定考査と口頭試問の配点について、60点と40点にしているが、配点比率を見直すことになった。数学能力測定考査は4時間だが、口頭試問は一人にあまり長い時間をかけることができないので、平成28年度のような6対4の配点比率では口頭試問の比率が大きすぎるという懸念が実施前からあった。実際、口頭試問を実施したところ数学について突っ込んだ質問はできないため、やはり数学能力測定考査の配点比率を大きくすることが妥当であるという結論に至った。

文部科学省から認可されていない学校からの出願者があり、理学部の定める出願資格には該当しないので、願書を受理することはできなかった。当該者は、平成26年度 ELCAS（京都大学グローバルサイエンスキャンパス）にも参加して、基礎コース及び専修コースを学修していたことが判明している。

4. 今後の募集人数の拡大や改善点など

上記の改善策として、第2次選考の筆記試験（数学）の合格者発表を試験当日の午後10時に合否照会システムで発表することとし、不合格者は直接来学することなく結果がわかるように改善した。また、そのことを学生募集要項に明記した。

第2次選考の数学能力測定考査と口頭試問の配点について、80点と20点に変更して数学能力測定考査のウェートを大きくした。

出願資格として「本学において、個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、平成29年3月31日の時点において20歳未満18歳に達したもの」を追加した。

募集人員の拡大については、特色入試で入学した学生の学業成績等を追跡調査して

検討を行う。

5. 特色入試で入学した学生の能力をさらに伸ばすための支援や教育プログラムの有無

合格発表直後、合格者に「複素解析」（アルフォース著）のテキストを郵送し入学前の学習を促すとともに、大学入学後の自主ゼミ、吉田塾セミナー、SGU 特別セミナーに積極的に参加することを勧めた。また、入学後は、吉田塾セミナーと SGU 特別セミナーのガイダンス日時をメールで周知した。

一方で、理学部は緩やかな専門化を教育理念としており、特色入試合格者が、数学系を含めた特定の系に早い段階で専門化することを前提としてはいないため、その他については一般入試入学者と異なる特別扱いはしておらず、特色入試入学者と一般入試入学者が自学自習の精神の下、自ら交流を深める環境が望ましいと考えている。

【部局の取組 － 医学部医学科】

1. 特色入試を通して求める人物像

医学部医学科に入学してくる学生の出身校については、近年、極度に有名私立進学校への偏重が見られる。優れた人材は確保できているものの、ユニークな京都大学らしい人材が減少していること、国内において基礎医学研究者を目指す人材の枯渇が問題となっていることから、特色入試では学力だけではなく科学的好奇心に溢れたユニークな人材、世界の医学をリードするような医学研究者としての資質・適性を持つ人材を求めている。

京都大学は創立以来、自由の学風、闊達な対話を重視し、世界トップレベルの先端的学術研究を推進してきた。医学部医学科は、社会が大きく変革している現代においても、京都大学の学問環境で学び、研究することで、世界をリードできる人材、具体的には以下の要件を満たす人材を全国から広く求める。

- (1)医学・生命科学に深い関心を持ち、かつ真摯な姿勢、熱意を持って真理を探究できる将来の世界の医学をリードするような医学研究者としての資質・適性を持つ人材。
- (2)(1)以外でも自然科学の少なくとも 1 領域において傑出した能力を有し、かつ医学研究者としての資質・適性を持つ人材。
- (3)本学が提供する MD-PhD コースへの進学を希望する人材。

2. そのような人材を獲得するための方法と今年度の実績

(求める人材を獲得するための方法)

- ・高校 3 年生以外に、傑出した能力を有する高校 2 年生に出願資格を与えている。
- ・一般入試（点数重視）と異なり、大学入試センター試験を利用せずに選抜を行う。
- ・受験者個々に対して時間を掛け、学力重視ではなく人物を十分に評価する選抜方法を実施することにより、求める人材を選抜する。

第 1 次選考では出願書類による選考を実施する。第 2 次選考の小論文試験では知的

能力をみるために基礎知識に基づいた理論的思考力、発想力、文章構成力等を評価する。また、学力だけでは計れない能力をみるために、さまざまな面接を実施（複数の試験官が受験者全員を面接）することで基礎医学研究者としての素養、適性を多角的に評価している。

（今年度の実績）

志願者 5 名、第一次選考合格者 5 名であり、最終合格者 1 名（合格者は高等学校卒業生）が入学した。

3. 今年度実施によって明らかになった問題点、課題

特色入試初年度ということから、志願者が少なかったと思われるが、次年度も同様であった場合には、対策を検討する必要がある。

小論文問題は、3 問題（物理系、化学系、生物系）から 2 問選択の形式をとったが、今年度は全員が物理系、化学系問題を選択した。選択問題が異なった場合、点数により調整が必要となることが懸念されるため、今後も選択形式を続けるかどうかは課題となる。

4. 今後の募集人数の拡大や改善点など

募集人数の拡大については、現在のところ予定していない。特色入試には一般入試よりも遙かに大きな手間と労力が掛かる。学力重視ではなく人物を十分に評価するため、面接試験において面接員は全ての受験者を面接していることから、募集人数は 5 名が限界である。

次年度の改善点として、出願資格を「国内のバカロレア校」にも拡大し、推薦要件も英語能力試験に「IELTS」を追加し、志願者の対象を広げた。項目 3 にあげた問題点や課題については実施前から想定していたことではあるが、次年度以降の状況を分析したうえで、必要に応じた改善を検討する予定である。

5. 特色入試で入学した学生の能力をさらに伸ばすための支援や教育プログラムの有無

- (1) 特色入試で入学した学生を対象に、医学部教育研究支援基金（KMS FUND）を資本とした「MD 研究者育成奨学金」を設置し、当該学生が余裕を持って研究活動に従事できるよう、1 ヶ月 4 万円の奨学金を給付している。
- (2) 基礎医学研究者の育成を目的に、学部生が希望により登録できる MD 研究者育成プログラムを用意し、初年次から研究活動への参加を可能としている。本年度入学者 112 名のうち、35 名が本プログラムに登録し、9 月より研究活動を始める。
- (3) 医学部では大学院医学研究科と共同して、2001 年に MD-PhD コースを設置した。本コースは、学部 4 回生修了時点で学部を休学し大学院博士課程に進学、医学研究に専念し、早期に医学博士の学位を取得後、学部 5 回生に復学、医学部卒業時には医学士（MD）に加えて医学博士（PhD）の学位を得ることができる。
- (4) 本年度より、前述の MD 研究者育成プログラムと連携した新 MD-PhD コースを設置し、従来の学部挿入型コースに卒後進学型コースを加えた。卒後進学型

MD-PhD コースにより本研究科博士課程に入学した者は、本研究科における修業年限の特例措置による学位申請が認められ、早期に学位を取得することが可能となる。

- (5) 特色入試で入学した者は原則として MD 研究者育成プログラムに参加し、MD-PhD コースに進学することとなっている。

【新 MD-PhD コース】

(学部挿入型)

医学部課程				大学院博士課程 (MD-PhD コース)				医学部課程	
1	2	3	4	D1	D2	D3	D4	5	6
MD 研究者育成プログラム				*学部課程を休学し、博士課程入学					
ラボ・ローテーション (基礎)		ラボ配属							
		研究計画 プロポーザル作成							

(卒後進学型)

医学部課程						➡	大学院博士課程 (MD-PhD コース)			
1	2	3	4	5	6		D1	D2	D3	(D4)
MD 研究者育成プログラム							*学部卒業後、2 年以内に博士課程入学			
ラボ・ローテーション (基礎)		ラボ配属								
				研究計画 プロポーザル作成						

【部局の取組 — 医学部人間健康学科】

1. 特色入試を通して求める人物像

医学部人間健康科学科は、国家資格をベースに、国際的視野を兼備えた医療専門職のリーダーや研究者の養成を推進する。

特色入試ではこのうち看護師、保健師、理学療法士、作業療法士のモチベーションを持った学生を募集する。

多面的かつバランスの良い思考力で課題や問題を抽出し解決していく医療のエキスパートとなりうる人材を求めている。

2. そのような人材を獲得するための方法と今年度の実績

人材を獲得するための方法として、小論文と面接試験を行った。
実績については、下記のとおりである。

平成28年度医学部人間健康科学科特色入試実績について

専 攻	募集人員	志願者数	第1次選考 合格者数	受験者数	合格候補者数	合格者数	備 考
看護学専攻	10	13	13	13	10	1	
理学療法学専攻	3	7	7	6	4	2	
作業療法学専攻	3	2	2	2	2	2	
合 計	16	22	22	21	16	5	

3. 今年度実施によって明らかになった問題点、課題

問題点としては特色入試自体や組織再編に対する PR 不足に伴い、受験生の数が少なかった点が挙げられる。ただし、入学してきた学生は極めて優秀・好ましい人材であり、試験方法としては間違っていないと現在のところでは考えている。

4. 今後の募集人数の拡大や改善点など

改善策として、平成 28 年度から平成 29 年度において、看護学で 10 名を 20 名、理学療法学で 3 名を 5 名、作業療法学で 3 名を 5 名と、募集人数の拡大を行った。

また、試験時間を 2 時間 30 分から 3 時間とし、受験生がじっくりと解答に取り組めるように改善している。出題に関しても、詳細は開示できないが工夫をした。

さらに PR 活動として、

- ・学科 PRDVD の作成
- ・学科教員が近畿の主な高校を回り、DVD の配布、個別説明を行う。
- ・全 47 都道府県の主な高校に上記 DVD を送付。
- ・京都大学交流会（京都・仙台・札幌・福岡・名古屋・東京・広島）全てに学科長と特色入試担当者が参加し、他学部のようにビデオ上映ではなく生の声で PR を行い、また各地の高校および予備校の担当者と直接に話しをして組織改革や特色入試の PR を行っている。

5. 特色入試で入学した学生の能力をさらに伸ばすための支援や教育プログラムの有無

平成 29 年度の組織再編後より、特色入試入学者向けのカリキュラムを用意している。

その一例として 1 回生時に開講される「人間健康科学Ⅰ～Ⅴ」においては、早くから各医療専門職の役割の理解を助けるためのプログラムを実施し、各種プレゼンテーションや実習施設での対人援助実習、障害者体験実習等でグループリーダーなど、中心的な役割を担わせ、将来、各分野の領域において若手人材をリードしていける能力を涵養する。

【部局の取組 ― 工学部】

1. 特色入試を通して求める人物像

工学部における教育方針のもと、アドミッション・ポリシーを策定し、次のような入学者を求めている。

- ① 高等学校での学習内容をよく理解して、工学部での基礎学理の教育を受けるのに十分な能力を有している人。
- ② 既成概念にとらわれず、自分自身の目でしっかりと物事を確かめ、それを理解しようとする人。
- ③ 創造的に新しい世界を開拓しようとする意欲とバイタリティーに満ちた人。

更に、学科毎に望む学生像を明確化している。

多様な入学者選抜を行う中での特色入試では、将来、世界を牽引するグローバルリーダーとなり得る特筆すべき能力、リーダーシップと高い基礎学力を持つ人材を求めている。

2. そのような人材を獲得するための方法と今年度の実績

全国 414 の高校に特色入試の案内用パンフレットを送付すると共に、高校生を対象とした京都大学オープンキャンパス、中学・高校生対象の工学部オープンセミナーの開催や高校の先生方との意見交換を目的とした京都大学交流会への参加も行っている。また、優れた教育研究資源を積極的に活用した研鑽を通じて、主体的に科学を究めようとする高校生の育成を目的としたグローバルサイエンスキャンパス事業にも積極的に参加している。学科によっては教員の出身高校及び近隣の進学校への宣伝訪問を行うなどして、高校等に対して積極的に特色入試の周知、広報を図っている。

○特色入試案内用パンフレット送付先（全国 414 の高校）

- ・SSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校
- ・京大と各都道府県教育委員会との協定校
- ・東大・京大の合格者ランキングで合格者 5 名以上の上位校
- ・京大工学部出願者数上位校

○オープンキャンパスの実績

学科毎の独自企画、女子高生のための「テク女子」企画、学部相談コーナーを設け、特色入試で求める人物像の獲得に向けた各種PRを行っている。

平成 27 年度

- ・各学科独自の企画・「テク女子」企画参加者数 1,495 名
- ・学部相談コーナー参加者 60 名

平成 28 年度

- ・各学科独自の企画・「テク女子」企画参加者数 1,524 名
- ・学部相談コーナー参加者 79 名

○工学部オープンセミナー

工学に興味のある生徒を対象に研究者（教員）が様々な分野の研究内容をわかり

やすく講演している。

- ・平成 28 年度 全国 82 校の中学・高校から計 187 人参加

○京都大学交流会

本部入試企画課の企画で平成 27 年度は、京都、福岡、東京、広島で開催。工学部からは、京都、東京に特色入試担当者が参加し説明を行っている。

○ELCAS（科学体系と創造性がクロスする知的卓越人材育成プログラム）

京都大学と 12 都府県・政令市の教育委員会による広域コンソーシアムを中心として事業の運営にあたり、高校生に最先端の講義や実験・実習の体験指導を行っている。平成 27 年度の専修コース、基盤コースにおける工学部系分野での受講者数は、以下のとおり。

平成 27 年度

基盤コース（前期） 450 人（150 人 × 3 クラス）

基盤コース（後期） 56 人

専修コース 14 人

○出身高校・進学校への宣伝

いずれも、募集要項と工学部で作成した特色入試パンフレットを持参し、進路指導部の先生や校長先生に説明を行った。

○平成 28 年度特色入試実績

	地球工学科	電気電子工学科	情報学科	工業化学科	計
募集人員	3	5	2	若干	10+若干
志 願 者	0	12	1	0	13
合 格 者	0	3	1	0	4
入 学 者	0	3	1	0	4

（参考） 学部一般入試

工学部入学定員 955（平成 28 年度入試）

受入学生数（目安：前期日程募集人員 945）

地球工学科 182 電気電子工学科 125 情報学科 87 工業化学科 235

3. 今年度実施によって明らかになった問題点、課題

平成 28 年度特色入試では、地球工学科、工業化学科で志願者がいなかった。それは、国際的な科学競技会に出場した者又は国内大会における成績優秀者であることといった高水準な推薦要件であったことが原因と分析している。そこで、課外活動などの顕著な実績、書類選考及び大学入試センター試験の成績を評価することに重点を置き、平成 29 年度特色入試より推薦要件の変更を行っている。

4. 今後の募集人数の拡大や改善点など

平成 29 年度特色入試では、情報学科、工業化学科が募集人員を増員し、また、平成 30 年度特色入試から建築学科、物理工学科が参入することで、募集人員の拡大を

図っている。このため、平成 30 年度特色入試では、平成 28 年度の 2.5 倍となる。

今後、入学後の学業成績、進路等のデータ、各学科での面談記録等を蓄積し、入試成績の相関についても考慮に入れながらそれらを分析することにより改善点等の議論を行うことが必要と考える。

(募集人員)

	地球工学科	建築学科	物理工学科	電気電子工学科	情報学科	工業化学科	計
平成 28 年度入試	3	0	0	5	2	若干	10+若干
平成 29 年度入試	3	0	0	5	3	7	18
平成 30 年度入試	3	2	5	5	3	7	25

(参考) 学部一般入試 (平成 29 年度入試)

工学部入学定員 955

受入学生数 (目安：前期日程募集人員 937)

地球工学科 182 建築学科 80 物理工学科 235 電気電子工学科 125

情報学科 88 工業化学科 228

5. 特色入試で入学した学生の能力をさらに伸ばすための支援や教育プログラムの有無

今後、入学後の学業成績、進路等のデータを蓄積し、入試成績の相関についても考慮に入れながらそれらを分析し、検討していく予定である。

平成 28 年度特色入試

平成 28 年度特色入試の結果

(平成28年4月1日現在)

学部・学科・専攻	募集人員	志願者数	倍率	第1次選考 合格者数	第2次選考 受験者数	欠席者数	第2次選考 合格者数	最終選考 合格者数	辞退者数	入学者数
総合人間学部	5	29	5.8	29	29	0	—	5	0	5
文学部	10	40	4	9	9	0	—	7	0	7
教育学部	6	25	4.2	12	12	0	7	5	0	5
法学部(後期日程)	20	324	16.2	324	130	194	—	22	1	21
経済学部	25	77	3.1	61	60	1	—	25	0	25
理学部	5	59	11.8	59	59	0	5	5	0	5
医学部	5	5	1	5	5	0	—	1	0	1
看護学専攻	10	13	1.3	13	13	0	10	1	0	1
人間健康 科学科	3	7	2.3	7	6	1	4	2	0	2
理学療法 学専攻	3	2	0.7	2	2	0	2	2	0	2
作業療法 学専攻	3	2	0.7	2	2	0	2	0	0	0
薬学部	3	0	—	—	—	—	—	0	0	0
地球工学科	5	12	2.4	—	—	—	—	3	0	3
電気電子工学科	2	1	0.5	1	1	0	1	1	0	1
情報学科	若干	0	—	—	—	—	—	0	0	0
工業化学科	3	20	6.7	10	10	0	—	3	0	3
食料・環境経済学科	108	616	5.7	534	338	196	31	82	1	81
計										

平成 29 年度特色入試

選抜日程

学 部・学 科 名		出願期間	第1次選考 結果発表	第2次選考	第2次選考 結果発表	最終合格 発表
総合人間学部		11/1～7	11/30	12/17	－	2/8
文学部		11/1～7	－	12/17	－	2/8
教育学部		10/3～7	11/7	11/26、27	12/15	2/8
法学部		1/23～2/1	2/28	3/13	－	3/23
経済学部		11/1～7	11/30	12/17	1/13	2/8
理学部		10/3～7	11/7	11/26、27	12/15	2/8
医学部	医学科	11/1～7	11/30	12/17、18	－	1/11
	人間健康科学科	10/3～7	11/7	11/12、13	－	2/8
薬学部		11/1～7	11/30	12/17	－	2/8
工学部	地球工学科	11/1～7	－	－	－	2/8
	電気電子工学科					
	情報学科		11/30	12/17	1/13	2/8
	工業化学科		11/30	－	－	2/8
農学部	資源生物科学科	11/1～7	11/30	12/17	1/13	2/8
	応用生命科学科					
	地域環境工学科					
	食料・環境経済学科					
	森林科学科					
	食品生物科学科					

注：入学手続きは、法学部を除き、2月15日とします。法学部は3月27日とします。

○出願期間 △第1次選考結果発表 □第2次選考 ◇第2次選考結果発表 ☆最終合格発表 ●入学手続
下欄の数字は日付を表す

	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合人間学部		○ 1～7	△ 30	□ 17	☆ 8 15	
文学部		○ 1～7	□ 17		☆ 8 15	
教育学部	○ 3～7	△ 7	□ 26 27	◇ 15	☆ 8 15	
法学部					○ 23～1	△ 28 □ 13 ☆ 23 27
経済学部		○ 1～7	△ 30	◇ 13	☆ 8 15	
理学部	○ 3～7	△ 7	□ 26 27	◇ 15	☆ 8 15	
医学部	○ 3～7	△ 1～7	□ 30	☆ 11	● 15	
		△ 7	□ 17 18		☆ 8 15	
薬学部		○ 1～7	△ 30	□ 17	☆ 8 15	
工学部		○ 1～7			☆ 8 15	
		○ 1～7	△ 30	□ 17	◇ 13	☆ 8 15
		○ 1～7	△ 30		☆ 8 15	
		○ 1～7	△ 30		☆ 8 15	
農学部						

出願状況と選考結果

平成29年度

平成29年度京都大学特色入試の出願状況は下記のとおりです。（平成28年12月15日現在）

学部・学科・専攻	募集人員	志望者数	倍率	第1次選抜 合格者数	第2次選抜 合格者数	最終選抜 合格者数
総合人間学部	5	16	3.2	16		
文学部	10	42	4.2	—		
教育学部	6	21	3.5	11	7	
法学部	20					
経済学部	25	64	2.6	64		
理学部	5	47	9.4	47	5	
医学部 医学科	5	5	1.0	5		
医学部 人間健康科学科 先端看護科学コース	20	33	1.7	32		
医学部 人間健康科学科 先端リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	5	16	3.2	16		
医学部 人間健康科学科 先端リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	5	7	1.4	7		
薬学部 薬科学科	3	3	1.0	3		
工学部 地球工学科	3	13	4.3	—		
工学部 電気電子工学科	5	11	2.2	—		
工学部 情報学科	3	4	1.3	1		
工学部 工業化学科	7	7	1.0	5		
農学部 資源生物科学科	3	25	8.3	12		
農学部 応用生命科学科	3	9	3.0	6		
農学部 地域環境工学科	3	11	3.7	9		
農学部 食料・環境経済学科	3	10	3.3	10		
農学部 森林科学科	3	13	4.3	12		
農学部 食品生物科学科	3	17	5.7	10		

監事意見

■ 京都大学特色入試改善への取組

〈高大接続改革と多面的・総合的入学者選抜〉

高度経済成長期の日本では一定の標準的学力を備えた人材を選抜し社会に送り出すことが大学に求められていたが、生産年齢人口が減少する現在の日本では選抜機能よりはむしろ一人一人の持つ多面的能力を伸ばす教育を提供し、将来を予測することが難しいグローバル社会におけるリーダーとなる人材を送り出す役割が求められている。山極総長の掲げる WINDOW 構想の「野性的で賢い (Wild and Wise) 学生」を育てるという夢は、それを一言で表したものであろう。

そのためにも、学力試験の成績だけで選抜するのではなく、学ぶ楽しみ、わかる喜び、発見するときめきを体験し、確かな基礎学力に裏打ちされた意欲・情熱にあふれる多様な人材を受け入れるための多面的・総合的選抜が望ましい。京都大学が全国に先駆けて始めた特色入試はそのための第一歩であり、今後の発展性を考えると日本の初等中等教育を変えるための先兵として高く評価してされる。

しかしながら、このような入学者選抜が存在することはあまり知られていないために、普通の受験勉強に励む受験生の方が圧倒的多数であり、初年度は志願者が少なく期待外れに終わった学部もあるだろうが、日本の初等中等教育を変える試みを始める苦しみと心得て、選抜方法の改善を行うとともに広報活動を続けていくことが将来の大きな成果につながると思われる。

〈第 1 回特色入試の結果〉

選抜日程を一般入試の後期日程に合わせた法学部を除けば、総合人間学部・文学部・教育学部・経済学部・理学部および農学部の食料・環境経済学科で志願倍率が 3 倍を超えた。高校生及び進路指導担当教員がこのような新たな選抜方式に慣れていない状況で、これだけの学部・学科で志願者が 3 倍を超えたのは、教育推進・学生支援部の入試企画課を中心に 2 年前から全国を回って広報活動に努めてきた成果であろう。

〈第 1 回特色入試の反省〉

第 1 回目に当たる平成 28 年度特色入試の反省点としては学力試験だけに基づく一般入試との整合性に気を取られたために、受験生に対するハードルが高くなったことが挙げられる。センター試験の最低点も概ね高めに設定されているが、国際科学オリンピック出場したことを受験または推薦要件に入れるなど志願者を限定しすぎた学科もあった。平成 29 年度の工学部の各学科ではこの点の改善が行われ、志願者に対する窓口が広がった。今後さらに志願者が増えることが望まれる。

〈特色入試の改善〉

初年度に比べると、特色入試の募集定員は増加している。農学部では平成 28 年度は 1 学科だけであったが、平成 29 年度は 6 学科に拡大する。また、医学部人間健康科学科では定員 16 名から 30 名に増員する。今後、特色入試が高校生に知れ渡るにつれ、志願者はさらに増大す

ることが期待される。一般入試と特色入試で入学した学生の、大学における学びへの適応度を見るために GPA などの経年変化やグループ学習や学部における自由研究活動などを追跡調査することにより、特色入試の成果を検証するとともに、更なる改善を講じ定員拡大が図られることを期待する。

〈自学自習のできる人材育成に向けて〉

特色入試により入学した学生は一般入試で入学した学生に比べ、主体的に学ぶ態度が身についていると思われる。そのような学生の自ら考える能力をさらに伸ばすために、医学部医学科において研究者を目指す特別コースを用意しているように、他学部においても学部低学年の段階から自ら課題を設定し、その課題解決に向けて自由研究 (Independent Study) を行う学生に対する支援を期待したい。

京都大学に学ぶ学生は、京都大学の伝統を受け継ぎ、自主独立の精神を持ち、自由な発想で自ら学ぶ学生であってほしい。特色入試の現在の定員は少ないとはいえ、そのような学生を受け入れるための第一歩である。特色入試の成果を踏まえ、一般入試においてもそのような学生が多く入学するような工夫が望まれる。